

ちょっと ブレイクしませんか？

今号から始めました連載企画
精神科医でありながら映画評論も本業
という粥川先生に毎号エッセイをお寄
せいただきます。

黄 昏

イソップ物語に「胃袋と足」という小話がある。

「胃袋と足が能力のことで言い争った。足が事あるごとに自分の方がずっと強い、腹なんかそっくり運べるほどだ、と言うので、こちらも答えて言うには、『しかしな、お前さん、わたしが栄養を補給してあげなかったら、お前さんたちだって何も運べないのだよ』」

上司と部下、親会社と子会社、開発と営業、製造元とメンテナンス、経営者と被雇用者、列車の運転と線路の保線、司令官と前線兵士などの関係を振り返る際に、示唆に富む逸話だと思う。そこには上下関係や差別化ではなく、相補的關係が存在することが真実のようだ。

社会人となって仕事の喜びや苦しみに明け暮れているうちに、誰しも歳をとり、己の職業の終焉を迎える時が訪れる。定年という社会人の終着駅だ。人生の黄昏時は、一抹の虚しさが漂っている。老境に入って秀作を演じているのは、ジェシカ・タンディの「ドライビング・ミス・デージー」、「フライド・グリーン・トマト」と、「怒りの葡萄」以来の名優ヘンリー・フォンドの「黄昏」などが記憶に残る。

老境の医師の心理を描いた作品では、ベルイマンの「野いちご」の右に出るものはない。半世紀の記憶を再現しながらのロードムービーで、次第にノスタルジアの世界に浸る老人の心の核心をえぐり出している。

中年期の心理描写といえば、山田洋次監督の「たそがれ清兵衛」が出色だ。幕藩体制下の下級武士が、奥さんに先立たれて、男手一つで娘と暮らす構図は、奥さんを癌で亡くし、男手一つで育児もしながら世の中に貢献する企業人の姿とだぶる。趣味の登山も音楽もせず、仕事と育児・家事に全身を傾ける。

クリント・イーストウッド監督主演の「許されざるもの」は、やはり奥さんを亡くして、男手一つで、育児と百姓に精を出す元ガンマンの物語だ。剣にしる銃にしる、名手としての昔とった杵柄を發揮して、周囲をあとと思わせる。

窓際族と揶揄されながら、※捲土重来を密かに目論む、団塊世代にも、勇気と活力を与える作品だ。



※捲土重来…一度敗れたり失敗した者が、再び勢いを盛り返してくること



初めまして。御社からエッセイを依頼されました精神科医の粥川と申します。仕事のお疲れを癒すことが出来ればと考えて、映画作品を紹介します。ホラーやバイオレンスは苦手ですので、ご容赦下さい。

皆さんの忌憚のない感想や批判をお寄せ下さい。

精神科医・映画評論家
かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学 保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授